

各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

令和5年度中学入試

[中期B・J入試]

国語科 問題

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、表紙を含めて28ページあります。

試験中に、印刷が見づらかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

- 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
- 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[中期B・J入試] 受験番号 _____

金蘭千里中学校

①本文は、「ぼく」（玲）が母親の実家へ行つたときの場面である。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

昼ごはんの後、部屋でひとりになつたら、どつと疲れが出た。

お母さんが実家を出るまで使つていた部屋だ。今日と明日の二晩、ぼくはここで寝ることになつている。

赤と緑のチェック柄の、毛布みたいなカバーがかかつたベッドに寝転んで、室内を見回してみる。ぼくの知らない外国映画のポスターや、サイドテーブルにいくつも置かれたぬいぐるみが、女子っぽい。勉強机のひきだしにくつついているプリクラも、日に焼けて色あせたカーテンの小花模様も。

1 お母さんも昔は子どもだつたんだなあ、と思う。あたりまえのことなんだけど、やつぱり不思議だ。
寝返りを打つて、あおむけになつた。手足の力を抜く。小学生だつたお母さんも、こうしてベッドに寝そべつて天井を見上げてたんだろうか。

「玲くんはお母さんの小さい頃によく似てるわ。目もとなんて、そっくり」「あの頃はかわいかつたのになあ、あいつも」

①どう答えたらいいのかわからなくて、ぼくはいなりずしをもりもりほおばつた。

実は、お母さんがおじいちゃんたちとぎくしやくしているのは、相性の問題だけじやない。それも叔父さんが教えてくれた。「玲にも關係なくはないし、知つとくべきだよな」と前置きして。

話は十年前にさかのぼる。

「2姉ちやんがひとりで子どもを産んで育てるつて言い出したとき、お袋も親父もかなり心配してさ。実家に戻つてこい、つて姉ちやんに言つたんだ。妊娠が毎日遠くまでアヅウキンするのは大変だし、とりあえず仕事もやめて、ゆっくり休んだらいいつて。同居してれば子育ても手伝いやすいしな」

叔父さんは言つた。

「ふたりとも、姉ちやんのためを思つてすすめたんだよ。特に、お袋な。あの頃は姉ちやん、今以上に（2）働いてたし。だけど」

だけど、お母さんはおばあちゃんたちのbティアンを断つた。
仕事をやめるなんて考えられない。わたしは自分の研究を愛しているし、誇りを持っている。育児と仕事を両立させている同僚もいる、大学と提携している保育所もある、がんばればなんとかなる、とお母さんは言い張つた。

ところが、おばあちゃんもおばあちゃんで譲ゆずらなかつた。

「3お袋も外で仕事をしながら、おれらを育てた。つまり経験者だな。だからこそ、苦労もわかつてゐることなんだろ。ばあちゃんたちに手伝つてもらつて、どうにかこうにか回つてたつて言うんだ」

叔父さんはため息をついた。

「どつちも全然ひかなくて、ついにお袋がキレてさ。あんたひとりじややつてけつこない、みたいなことを言い出して。育児がどんだけ大変かわかつてない、母親になる覺悟が足りてないって」

修羅場しゅらばを思い出したのか、ぶるんと体を震ふるわせる。お母さんはともかく、あの穏おだやかなおばあちゃんがそこまで熱くなつたなんて、信じられない。

「そんで、姉ちゃんもキレたんだよ。もう完全にけんか腰こし。わたしひとりでしつかり育ててみせます、お母さんたちには迷惑めいわくかけませんからご心配なく、つてへ A ～を切つた」

「へ A ～？」

「びしつと言つてやつた、つてこと」

そうして言葉どおり、出産後も実家と距離きょりを置いてきた。

「姉ちゃんらしいつちや、姉ちゃんらしいけど。そもそも誰かに頼たよつたり甘えたりあまたりつてのが下手だろ？ 不器用つていうか、負けずぎらいつていうか、cソーンな性分しょうぶんだよあれは」

そうかもしれない。うちのお母さんは、子ども会の当番も学校行事の準備作業も、やらなくちやいけないことはどんなに忙いそがしくても自力でやりとげたがる。よそのお母さんに助けてもらつたときも、借りを返さなきや、と後で必ず埋めあわせをする。叔父さんが相手だと少しはましだけれど、それでも、ぼくを預けるときにはしつこくお礼を言つている。ぼくのお手伝いにも、いちいち「ありがとうございます」と忘れない。

「おれは最初、どつちかつていうとお袋よりも姉ちゃんサイドだつたんだ。お袋の気持ちもわかるけど、強引ごういんすぎる気がして。姉ちゃんの性格からして、お前には無理だつて一方的に決めつけられたら、むきになるに決まつてんだろ」

けれどな、と叔父さんは続けた。

「後から親父に聞いたら、②話はもつとややこしかつたらしい」

「もつと？」

もう十分ややこしい。ぼくはなんだか頭が痛くなつてきた。

「ああだ、（注）マリンちゃん事件だ」

「マリンちゃん？」

さらに頭がこんがらがる。

「姉ちゃんはそのときまで、お袋と4親父|なんにも話してなかつた。子どもができたつてことも、ひとりで産んで育てるつてことも。でも、
5ばあちゃんと6じいちゃんはもう全部知つてたんだ」

お母さんも、わざと内緒にするつもりはなかつたらしい。ただ、いつどんなふうに切り出したらいいか、迷つていた。

「(3) してたら、まんまとばあちゃんに気づかれたんだつてよ。玲のひいばあちゃん。お前は覚えてないか。いつもにこにこしてゐ
んだけど、そういう鋭いところもあるひとだつたから」

なにか悩みごとでもあるの、とひいおばあちゃんからdジンミに気遣われて、お母さんは胸につかえていた秘密をつい打ち明けた。
「姉ちゃんは小さい頃から、じいちゃんばあちゃんになついていたしな。だけど、すつ飛ばされたお袋にしてみたら、納得いかないわけ。な
んで一番に相談してくれなかつたんだつて」

「カヤノソト?」

お母さんの頼りない鼻声が、ぼくの耳によみがえつていた。

「そう、それ。まあ複雑だよな、親心ってのは。姉ちゃんも母親になつて、そのへんわかつてきただんじやないかつて氣もするけどね。ただ意
地もあるだろ。で、微妙にこじれたまま今に至る、つてこと」

複雑すぎて、ぼくには意味不明だ。

「ぼくはどうしたらいいの?」

「別に、普通にしてな」

叔父さんがにつこりした。

「玲がいてくれるだけで、空気が和むし。孫はへ B 、だな」

「へ B つてなに?」

叔父さんはへ B の画像をネットで検索してくれた。話の流れからして、すごくいい感じのものかと期待していたのに、ただの釘だつ
た。がつかりした。

(中略)

タゴはんは、すき焼きだった。

昼と同じでおじいちゃんとおばあちゃんが隣どうしに座り、向かいにぼくとひいおじいちゃんが並んだ。テーブルの真ん中に置いたカセツ
トコソロの上に、黒く光る鉄鍋てつなべがでんとのつている。

「いただきます」

四人で手を合わせ、まずは取り皿に卵を割り入れた。めいめい自分の分をかきまぜていると、「そうだ、父さん」とおじいちゃんが言った。

「今日も電話に出なかつただろ。散歩のとき」

卵が足りなくなりそうだつたから、買つてくるようになに頼みたかつたらしい。何度もかけてもつながらず、結局おじいちゃんが買いに走つたそ
うだ。

「スマホ、また家に置いてつたの？ それとも、気づかなかつただけ？」

「ああ、うん」

「置いてつたんだね？」

8 おじいちゃんが口をとがらせる。鍋に牛肉を入れながら、おばあちゃんも口を挟んだ。

「お出かけのときは、なるべく持ち歩いて下さいね。いざつてときに連絡がつかないと困りますから」

「ああ、うん」

卵を念入りにかきまぜる手を休めずに、ひいおじいちゃんは答えた。明らかに気持ちがこもつていな。聞いてないな、とおじいちゃんが不服そうにぼやき、

「玲も一緒に行つたんだつて？ 雨の中、ごくろうさん」

と、ぼくに話を振つた。

「あれが父さんにとつちや、eゼツコウのお出かけ日和なんだよ。あんまり晴れてるとつまんないらしい。変わつてるだろ」

ぼくとひいおじいちゃんをかわりばんこに見て、にやつと笑う。

「な、父さん。雲が多いほどいいんだよな？」

「多けりやいいつてもんでもない」

ひいおじいちゃんがめんどくさそうに答えた。

「はあ、そりや奥が深いね」

おじいちゃんが首をすくめ、正面に向き直つた。ひとまずひきさがることにしたようだ。じゅうじゅうとにぎやかな音を立ててゐる鍋から

肉をひときれつまんで、目の前にかざす。

「そろそろ、いいんじやないか」

「いけそうね」

おばあちゃんも鍋をのぞきこんだ。ひいおじいちゃんとぼくの取り皿に、香ばしく色づいた肉を一枚ずつ放りこむ。

「ちよつとおなかを空けておいてね、お赤飯もあるの。今日は③立春だから」

「玲、立春つて知ってるか？」

おじいちゃんが言つた。

「うん。一年のはじまりだよね？」

「お、よく知つてるな。若いのに」

「お母さんが教えてくれたから」

④おばあちゃんとおじいちゃんが、ちらつと目を見かわした。

「うちでは毎年お祝いしてるのよ。昔から、すき焼きとお赤飯を食べる決まりでね」

「うちは、焼肉あまからを食べに行くよ」

ぼくは甘辛い肉をかじつた。やわらかくて、おいしい。

「立春に？」

「うん、当日じゃないけど。二月のはじめのほうの、土曜か日曜に」

近所の焼肉屋さんで、満腹になるまで食べまくる。叔父さんが一緒の年も、ふたりだけの年もある。どつちにしてもお母さんはじやんじやん注文する。食べきれないんじやないかとぼくが言つても、聞き入れない。日頃は慎重ひごろ しんちゅうなわりに、ときたま強気になるのだ。お店を出るときには、立ちあがるのがしんどいくらいにおなかが重たくなつている。

お祝いなんだからあつといかなきや、というのがお母さんの言い分で、それでぼくも立春の由来を知つたのだった。

「そう……焼肉……」

⑤おばあちゃんが目をふせた。

ぼくはひやりとした。もしかして、よけいなことを言つただろうか。長年守ってきたルールを勝手に変えられて、氣を悪くしたかもしけない。

「あの、ごめんなさい。ほんとはすき焼きを食べるんだって、ぼく知らなくて」

言つてしまつてから、まずい、とまたもやあせる。これじゃ理由になつてない。ぼくが知らなくたつて、お母さんはちゃんと知つていたはずだ。

顔がひりひり熱い。どうしたらいいのかわからなくなつて、取り皿の底に沈しづんだ肉のかけらをお箸はしでつつく。うちにはすき焼き鍋もない、というのは言い訳になるだろうかと考えていたら、

「いいでしょ、どつちでも」

と、ひいおじいちゃんがぼそりと言つた。

「どつちも、肉だ」

「だな」

おじいちゃんがふつとふきだした。

「大事なのは、祝おうっていう気持ちだもんない？」

テーブルの上でおばあちゃんの手に自分の手を重ねたのが、ぼくからも見えた。^⑥うつむいていたおばあちゃんが顔を上げ、ぼくににっこり笑いかけた。

「成美も……お母さんも、忘れないでお祝いしてくれてたのね」

「そもそもうちだつて、全部が全部、昔のままつてわけでもないしな」

おじいちゃんが言う。以前は、子どもたちにプレゼントをあげるという習慣もあつたそうだ。うらやましい。

「年寄りだけじや、どうもなあ。クリスマスなんかも、子どもらが小さい頃は気合が入つたもんだけど」
「ね。だけど今年は、玲くんになにか用意しておけばよかつた」

「ああ、そうだな。ごめんな、気が回らなくて」

「いいよ」

ぼくはあわてて首を横に振つた。

「ひいおじいちゃんに、メモ帳を買つてもらつたし」

「へえ、父さんが？」

ひいおじいちゃんはもぐもぐと口を動かしつつ、浅くうなずいた。口の中に食べものが入つてゐるせいで返事ができないのかと思つたら、また次の肉をほおばつてゐる。特に説明する気はないようだ。

「あと、長靴も」
^{ながくつ}

さつき家に帰つてきて、玄関で長靴を脱いでいるときに、「よかつたら、これからも使つて下さい」とひいおじいちゃんが言つてくれたのだった。

「持つて帰つてもいいし、とりあえずここに置いておいてもいいし」

少し考えて、ぼくは答えた。

「じゃあ、置いときます」

うちにはぴったりのサイズの長靴が一足ある。それに、ここに置いておけば、次に来たときもまたこれをはいてひいおじいちゃんと散歩ができるだろう。左右をそろえ、ひいおじいちゃんをまねて、靴箱の手前に置いてみた。大きな深緑と、小さめの青。並んだ二足は、サイズのせいか親子っぽく見えた。

「長靴？ 玲に？」

おじいちゃんが首をかしげたとき、どこかで聞き慣れない電子音が響き出した。

「あら、電話」

おばあちゃんが立ちあがつた。壁際の棚に置かれた電話機のボタンが、ちかちか点滅していた。

電話をとつたおばあちゃんは、こっちを振り向いた。

「玲くん、お母さんよ」

ぼくが受話器を耳にあてるなり、「玲、大丈夫？」とお母さんはせかせかと言つた。

「大丈夫だよ」

「そう、よかつた」

ふうつと息を吐く音が、耳もとに吹きかけられた。

「電話、どうして出ないの。何度もかけたのに」

「あ」

リュックに入れたまま、部屋に置きっぱなしだ。

「ごめん、忘れてた」

「まあ、そんなことだろうと思つたけど。どう、そつちは？ 順調？」

「うん。順調」

昼間と同じ返事が、昼間よりも自然に、口から出た。すぐそばに立つているおばあちゃんと目が合つた。
「おばあちゃんにかわるね」

⑦お母さんがなにか言う前に、ぼくは急いで受話器を引き渡した。

「もしもし？」

おばあちゃんは両手で受話器をぎゅっと握りしめている。

「うん、いい子にしてる……ううん、とんでもない……」

おじいちゃんも席を立つて、ぼくたちのほうに（—4）と寄ってきた。片手でおばあちゃんのひじをつつき、もう片方の手で自分の胸を

指さしている。

「ちょうどすき焼きを食べてたところ……そうそう、立春だから」

ぼくは食卓に戻った。

ひとり残つたひいおじいちゃんが、おかわりをよそつていてる。豆腐やねぎはよけて、牛肉だけを器用につまみあげていく。迷いのない手つきを見ていたら、ぼくも急に食欲がわいてきた。よく考えたら、まだそんなに食べてない。

お箸をとり直したぼくに、ひいおじいちゃんが突然言つた。

「⑧今度、あなたの母さんも連れていらつしやい」

「ぼくが？」

聞き返したのは、逆じやないかと思つたからだ。ぼくが、お母さんを連れてくる？　お母さんが、ぼくを連れてくるんじやなくて？

「はい、あなたが」

ひいおじいちゃんはまじめな顔で即答した。ぼくもつられて、まじめに応えた。

「わかりました。連れてきます」

「よろしく頼みます」

後で、メモ帳に書いておこう。お母さんに話したいことがいっぱいあるから、うつかり忘れてしまわないように。

X おばあちゃん
お尻を浮かせ、鍋をのぞいた。あたたかい湯気があたつて、おでことほつぺたがじんわりと汗ばんだ。

ふと、Y ひいおじいちゃん
涼しい風がさあつと吹きこんできた。（ 5 ）と澄んだ冷たい空気を、ぼくは胸いっぱいに吸いこんだ。雨はもう上がつたようだ。ひい

おじいちゃんの頭上に広がる夜空に、細い月が静かに光つている。

（瀧羽麻子『博士の長靴』より　一部改めたところがある）

（注）マリンちゃん事件：玲が幼稚園ようちえんに通つていたころ、マリンちゃんとの間でもめごとがあつたが仲直りをした。そのことを周りの人は知つていたのに、玲の母親は仲直りした後で知ることになった。そして玲の母親が「わたしだけ、蚊帳かやの外だつたつてこと？」マリンちゃんのママも陽ちゃん（玲の叔父）も知つてたのに、わたしだけ……と言つたのを玲は聞いていた。

(一) 本文中の波線部 a ~ e のカタカナを漢字に改めなさい。

a ツウキン b テイアン c ソン d シンミ e ゼツコウ

(二) (1) ~ (5) に入る言葉を次のア ~ クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア すつきり イ きつぱり ウ しみじみ エ ほそぼそ
オ がんがん カ いそいそ キ ぐずぐず ク べたべた

(三) 傍線部① 「どう答えたらしいのかわからなくて、ぼくはいなりずしをもりもりほおばつた」とあるが、このときの説明としてもつとも適切なものを次のア ~ エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖父の言葉から現在の母はかわいくないと言われていると気づき、玲は祖父に強く抗議したいのだが、言い返す言葉が見つからないでいる。

イ 母親の容姿についてかわいいとかかわいくないとかを答えるのが照れくさく感じられて、玲は答えないですむように「まかそう」としている。

ウ 小さい頃の母は今の自分とよく似ていてかわいかつたと祖母から聞き、玲はうれしく思いつつ礼を言うのもおかしく感じられてそしらぬふりをしている。

エ 母親も昔はかわいかつたと言う祖父が、なつかしがりながらもさびしそうにしてているので、玲は返事ができずその場を取りつくろおうとしている。

(四) 「A」~「B」に入る言葉をAはひらがな三字で、Bはひらがな四字で答えなさい。なお、Bは本来「子は～B～」の形で用いることわざです。

(五) 傍線部②「話はもつとややこしかった」とあるが、どういうことが「ややこしかった」のか、その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 玲の母親が、出産や育児について自分の両親ではなく、自分の祖父母に先に知らせる形になってしまったこと。

イ 玲の母親は、玲を預けるなら自分の祖母を頼りにしようと考えていてそれが両親に知られてしまったこと。

ウ 玲の祖父母が玲を預かって世話をすることは最初から決められていたが、玲の母親には知られていなかつたこと。

エ 玲の母親の出産と育児については、玲の祖母と曾祖母との間で、あらかじめ相談されていたこと。

(六) 傍線部③「立春」とあるが、何月何日ごろのことか、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一月七日ごろ
イ 二月四日ごろ
ウ 三月六日ごろ
エ 四月五日ごろ

(七) 傍線部④「おばあちゃんとおじいちゃんが、ちらつと目を見かわした」とあるが、その理由としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 玲はまだ幼いのに立春が一年のはじまりの日だということを知っているので、今どきめずらしいことだと意外に思つたから。

イ 玲に立春のことを教えたのが母親だと聞いて、昔から家でお祝いをしていたことを覚えていて息子に伝えたのかもしれない感じ、驚いたから。

ウ 玲が立春のことを母親から聞いて知つていると分かり、昔からしているようにすき焼きと赤飯で今でもお祝いをしていると確信したから。

エ 玲から立春のことを聞いて二人とも娘のことを思い出し、いきどおりと恨めしさが押し寄せてくるような気持ちになつたから。

(八) 傍線部⑤「おばあちゃんが目をふせた」、傍線部⑥「うつむいていたおばあちゃんが顔を上げ、ぼくにつこり笑いかけた」とあるが、

「おばあちゃん」の変化についての説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 立春には一般的にはすき焼きを食べるものなのに、焼肉しか食べないと聞いて氣分を害したが、玲に氣を遣わせるのはかわいそなうので機嫌きげんを直した。

イ 立春にすき焼きではなくルールを変更へんこうして焼肉を食べると聞いてつらい気持ちになつたが、玲に手を重ねてなぐさめてもらつたので、少し気が楽になつた。

ウ 立春当日ではない日なのにお祝いとして焼肉を食べると聞いて、決まりどおりではないので腹立たしく思つたが、祝おうという気持ちがあるので認めることにした。

エ 立春には家の決め事としてすき焼きを食べることにしていたのに焼肉を食べると聞いて落胆らくたんしたが、忘れずお祝いを続けていたのだと思ひ直し、うれしくなつた。

(九) 傍線部⑦「お母さんがなにか言う前に、ぼくは急いで受話器を引き渡した」とあるが、「ぼく」のこのときの気持ちを説明したものと

してもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母からの電話に出なかつたことを咎められるのはもういやなので、祖母に助けを求めようという気持ち。

イ 母が祖母のことを悪く言うのを聞きたくなかつたので、なるべく早く話を終えたいという気持ち。

ウ 母と祖母とで話をしてほしいので、祖母と電話をかわるのを母が断れないようにしようという気持ち。

母の明るく話している声を祖母に聞いてほしくて、できるだけ素早く祖母とかわりたい気持ち。

(十) 傍線部⑧「今度、あなたの母さんも連れていらっしゃい」とあるが、「ひいおじいちゃん」がどのように考えていることが表されているか、その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひいおじいちゃんが、実家と距離を置き意地を張つて両親と打ち解けることができずに入る孫を呼び寄せるには、玲が適任であると考えていること。

イ ひいおじいちゃんが、両親といつさい口をきかない孫を実家に呼び、両親と少しでも仲良くなれるよう仲介ちゅうかいできるのは玲だけだと考えていること。

ウ ひいおじいちゃんが、実家に帰つてこない孫と会つて、帰らない理由を聞いてみたいが、玲ならその機会が作れるに違ちがいないと考えていること。

エ ひいおじいちゃんが、お互いたがを思いやる心もなくしてしまった家族のきずなをつなぎ直すことができるのは、玲しかいないと考えていること。

(十一) 玲の母親の名前を本文中から抜き出して答えなさい。

(十二) X おばあちゃん・Y ひいおじいちゃんと同じ人物を指すものを、本文中の二重傍線部1～8の中からすべて選び、それぞれ番号で答えなさい。

②次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

トランプ氏が当選した二〇一六年一一月の米国大統領選では、対抗馬のヒラリー・クリントン氏にとつて逆風になりかねない（注1）フェイクニュースや陰謀論がaカクサンし、「フェイクニュース」という言葉が世界で知られるきっかけとなつた。

大統領に就任したトランプ氏は、ツイッターを使って支持者に直接メッセージを届け、記者会見ではなく（注2）SNSで重要政策を発表した。さらには、ツイッターで、ニューヨークタイムズやワシントンポストといった米国の名門新聞やテレビ局を「フェイク」と断じてきたし、記者会見で（注3）CNNの記者を指しながら「おまえはフェイクだ」と（注4）恫喝したこともあつた。支持者はそのたびに、メデイアを擁護するのではなく、SNS上で「いいね！」をクリックしてトランプ氏に喝采を送ってきた。二〇一六年の大統領選から現在に至るまで、トランプ氏とその支持者が「敵」と見做してきたのはマスメディアであつた。

在任中の四年間、トランプ氏に好意的なマスメディアは数えるほどしか存在せず、少なくとも二〇年くらい前までの米国ならば、ここまで新聞とテレビを敵に回した政治家が世論の支持を得られるはずがなかつた。だが、再選を目指した二〇二〇年一一月の大統領選では、前回選挙の自身の得票を大きく上回るおよそ七四〇〇万票を獲得した。

民主党のジョー・バイデン氏の当選が確実になつても、トランプ氏は敗北を認めず、選挙で不正が行われたと主張してきたが、本書を執筆している二〇二〇年一月初旬時点では、不正を示す明確な証拠は見つかっていない。それでもトランプ氏を熱烈に支持する米国人は大勢おり、支持は海外にも広がり、日本語のSNS空間にも選挙の不正を訴え、トランプ氏を支持する声が根強く存在する。

大統領選挙の結果を確定する二〇二一年一月六日の連邦議会の合同会議には、選挙の不正を訴えるトランプ支持者の群衆が押し寄せ、一部が侵入して議事堂を占拠する事態となつた。不正を主張する人々のデモには、決まって「マスコミにだまされるな」「マスコミはフェイクだ」という横断幕やのぼり旗が登場した。日本国内でトランプ支持の立場から「不正選挙」を主張する人々が作つた集会の告知ビラにも「マスコミのフェイクに惑わされるな」の文字があつた。

トランプ政権の四年間で変わつたもの。それは、人間の「情報との付き合い方」である。正確に言うと、その変化は二〇一六年の大統領選の前から世界中で始まつていたが、トランプ大統領の誕生によつて、変化が急加速した。

二五年ほど前、二〇代だった私が鹿児島支局の駆け出し記者だつたころの話だ。①三〇歳前後の男性が突然、支局にやつて来て、「好きな女性に思いを伝えようとしただけなのに、彼女が一一〇番したために警察に逮捕された」と話し始めた。

男性は「女性が冷静に話を聞いてくれないので、彼女の手を掴んだところ悲鳴を上げ、なだめようとしたら揉み合いになり、軽いけがをさせてしまつた。悪いのは話を聞こうとしない彼女なのに、警察、検察、裁判所、弁護士、医師、すべての権力が一緒になつて僕を犯罪者に仕

立て上げた。助けて欲しい」などと一時間近く話し続けた。氏名、電話番号などを聞き取り、「後日ご連絡します」と言つて帰つてもらつた。

放置しておこうかとも思ったが、念のため取材してみたところ、女性に対するストーカー常習犯であることが分かつた。ある女性は恐怖のあまり何度も警察に相談していたが、当時はストーカー規制法がなく、警察は対応に苦慮していた。最終的には女性の体を押さえつけようとした際にけがを負わせたとして傷害容疑で逮捕され、あまりに（注5）執拗で悪質だとして実刑判決を受け、服役して出所したばかりであった。警察は再犯の恐れがあるとして、男性の所在と行動に注意を払つていた。

「連絡する」との約束は守るべきだと思い自宅に電話したところ、母親と思しき年配の女性が出た。新聞社であること告げると、ひどく警戒した声色になつたが、「〇〇さんに電話する約束になつています」と言うと取り次いでくれた。

いきなりストーカーの件に触れるのは得策でないと思い、「検討した結果、記事を書くつもりはありません。お力になれず申し訳ありません」と伝えたところ、先方は「え？」とびっくりし、しばらくの沈黙の後にこう言つた。今でも声色まで鮮明に覚えている。

「あのお、どの筋から圧力がかかつて書けなくなつたんでしょうか？ やつぱりマスコミって、眞実を知つても書けないんですか」新聞社には、こういう人がしばしば訪ねてきたり、電話や手紙でコントラクトしてきた。「マスコミは何らかの強い権力に支配され、圧力を受けているので、決して眞実を書くことはない」という、いわゆる「陰謀論」「陰謀（注6）史観」の持ち主である。

戦前から現代までの日本に存在した様々な陰謀史観の具体例について研究した歴史学者の秦郁彦氏は、陰謀史観を「特定の個人ないし組織による（注7）秘密謀議で合意された筋書の通りに歴史は進行したし、進行するだろうと信じる見方」と定義する（秦郁彦『陰謀史観』新潮新書、二〇一二年）。

元朝日新聞記者でフリージャーナリストの鳥賀陽弘道氏は著書『フェイクニュースの見分け方』の中で、近年の陰謀論・史観の持ち主に共通する特徴として次の六点を挙げている。

- (一) ある出来事の背景には、何らかの「秘密の強い力・組織」が働いている、と考へる。
- (二) 「強い力」を持つ者たちの狙いは、日本や世界を思い通りに動かすことだと考へる。
- (三) 「強い力」を持つ勢力が、裏で社会や歴史を動かしている、と信じている。
- (四) この勢力や陰謀の存在は、秘密のまま決して明るみには出ない、と信じている。
- (五) こうした勢力や陰謀の存在を新聞やテレビなど主流マスコミは一切伝えない。「強い力」を持つ勢力がマスコミに圧力をかけたり、マスコミを支配している、と信じている。
- (六) 自分たちが利益を得た場合には陰謀論は登場しない。自分たちが何らかの「被害」を受けたと考へる時のみ、その原因としての陰謀の存在を主張する。

(中略)

私が駆け出し記者だった一九九〇年代当時は、マスメディアを陰謀の一翼を担う勢力と見做す人は今ほど多くなく、陰謀論者に出会つたとしても、適当に相槌を打つておけば済んだ、という記憶がある。多くの場合、二度と会うこともない。しつこく連絡してくることもない。どこで悪口を言いふらされても実害もない。

しかし、それから四半世紀の時間が経過する間に、状況は変わつた。かつては社会のあちこちで持論を展開していた様々な陰謀論・史観の持ち主たちは、インターネットの爆発的普及によつて、連絡を取り合い、集団と化し、執拗にコメントを発し、政治にまで影響力を与えるようになつた。

そして何よりの大きな変化は、マスメディアが陰謀を企ててている主役の一部と見做され、インターネットの世界にこそ「眞実」がある、と考える人々が現れたことである。

ドナルド・トランプという人物は、②そうした人々の「情報」に対する認識の変化を敏感に嗅ぎ取り、陰謀論を社会に広めることを武器に権力を手にした、恐るべきサイガクの持ち主であると私は考えている。

既存の政治家、業界団体、(注8)ロビイスト、FBIなど捜査機関、オールドメディアの大手マスメディア。そうした(注9)既得権益層のエリートから成る「ディープ・ステート(国家内国家)」は米国民の敵であり、やつらは国民のために戦う自分を追い落とそうとしている。二〇二〇年一一月の大統領選における「不正」は、ディープ・ステートの企ての集大成だ——トランプ氏はそういうことを主張してきたし、その主張に喝采を送つてきた人々が大勢いる。

これまでのところ、連邦の司法当局や各州当局が、いくら大統領選の「不正」の証拠を探しても出てこない。だが、トランプ氏の熱心な支持者にしてみれば、「不正が見つからないこと」は何ら不思議でなく、むしろ想定の範囲内ですらあるだろう。

なぜなら、陰謀論を信じている人にとって、ディープ・ステートは「秘密組織」であり、「証拠を完全に(注10)隠蔽しているから」であり、「本来なら不正を明らかにするべき立場の検査機関やマスメディアはディープ・ステートの一員」であり、「不正の証拠がまったく出てこないほど完璧に隠蔽していること 자체が不正の証拠」だからである。

したがつて、物事を徹底して陰謀論的に考へている人とは、そうした考え方を改めてもらわない限り、対話が成立しない。陰謀論の持ち主に様々な事実や疑問を突きつけたり、矛盾を聞いたとしても、彼らは絶対に降参しない。陰謀論・史観の考へ方は「あれは××による陰謀だが、証拠は存在しない。なぜなら××の陰謀だからだ」という(注11)トートロジー(同義反復)によつて自己完結しているので、外から入り込む余地がないのである。

だから、陰謀論の持ち主は、自分が陰謀論の持ち主であるとは思っていない。こちらが、「あなたの考え方は陰謀論のようだ」と指摘しても、「自分は普通の日本人だ」「あなたこそ（注12）マスゴミに騙されている」などと自分が「普通」であることを強調されるだけである。

もし、本書の読者の中に陰謀論を信じている人がいた場合、本書を読んで「この白戸」という筆者は元記者だろう。自分のdブルスのマスゴミを守りたいだけだろう」と私の「陰謀」を主張するコメントをどこかのサイトに書き込むだろう。鳥賀陽氏が特徴として挙げたように、「③陰謀論者は自分の意見に賛成してくれる人の言うことだけを認め、自分の意見が否定された時には陰謀の存在を主張し、根拠薄弱な「事実」や荒唐無稽な「証拠」を挙げて反論を試み、冷笑や嘲笑を浴びせる。」

陰謀論者の主張は、科学や知性や常識ではねじ伏せることができるない。つまり、陰謀論者が力を持つ社会とは、自分の信じている情報が正しいのか間違っているのかを識別できない人や、そもそも自分の信じている情報の正誤を検証する意思のない人が力を持つ④恐ろしい社会である。

一九九〇年代後半に一般市民にインターネットが普及し始める以前のニュースの情報源は、極論すれば、どこの国でも新聞とテレビのみであった。米国では主に都市部の知識層がニューヨークタイムズなどの大手紙を読み、地方都市の人々は地元紙を読んでいたので、全米をつないでいたのは三大テレビネットワークであった。今から思えば、それはテレビを通じて情報資源が米国民に均質に分配される「⑤情報平等社会」であったともいえる。

日本の場合、朝日新聞と産経新聞の論調は昔から大きく異なっていたが、時事ニュースを淡々と伝えるという点はどの新聞社も同じであり、朝日の読者は（注13）田中角栄を知っているが、産経の読者は田中角栄を知らない、などということはなかつた。日本のマスメディアは「横並び」などとさんざん批判させていたが、テレビに加えて新聞が情報を国民に均質に分配している点では、米国以上の「情報平等社会」だったといえる。

人間にはもともと、「自分が知りたい情報」を優先的に信じ、「知りたくない情報」を（注14）忌避する心理的傾向がある。天気予報を例に考えてみよう。一週間後の日曜日の天気予報は雨だが、予報の的中精度はA、B、Cの三段階のうち、最も精度の低い「C」であつたとする。予報は雨のままかもしれないし、晴れに変わるかもしれない。そういう時、一週間後に屋内で仕事することが確定している人は、予報の変化を事実として淡淡と受け入れることができる。だが、同じ人であつても、一週間後にピクニックに出かけることが確定している場合には、「晴れに変わるかもしれない」と願い、晴れの兆候を必死に探そうとする。

マスメディアは、情報に関する選択肢を人々に与えない代わりに、こうした「知りたい情報を優先的に信じる」という人間の心理的傾向に一定の歯止めをかけていたと考えられる。マスメディアによつて視聴を強制されていた「知りたくない情報」の中には、「知りたくない情報」が、知らなければならぬ情報も含まれていたからである。

インターネットの普及以前のマスメディアは、味はおいしくないものの、これさえ食べていれば最低限の栄養バランスは保証される「⑥情報ランチ定食」のような存在だったと言えるかもしれない。情報源がマスメディアだけの時代には、人々が自分の責任において情報メニューを選ぶ機会は存在せず、人々に提供される情報の水準（情報ランチ定食の味）も高くはなかつた。

しかし、逆に言えば、個々人の情報収集力、情報分析力、情報の出所を吟味する能力、複数の情報を比較する能力——などが問われる機会は少なく、荒唐無稽なニセ情報、陰謀論、極端なeゲンセツに個人がはまるリスクも、今よりは低かつたと言えるだろう。

インターネットの普及は、こうした「人間と情報との関係」を一変させた。既存の紙の新聞とテレビに「知りたくない情報」を押し付けられていた人間は、インターネットにアクセスすることによって、おそらく人類史上初めて「自分が知りたい情報」だけを選択することが可能になつた。さらに、「自分が知りたい情報」だけを知つた人が「自分に同調する人が多いことを確認して安心するため」に集うことも容易になつた。

米国の法学・政治学者であるキヤス・サンステイーン氏は、インターネットの世界では無数の個人の意見が集約され、最終的には一つの大きな流れになっていく特徴があると指摘し、この特徴を「サイバー・カスケード」と呼んだ。カスケード（cascade）とは元々、階段のように小さな滝が連続している状態を意味する英単語である。サンステイーンは、人々がサイバー空間の一つの意見に同調していき、最終的には大きな集団になることを、小さな滝が最終的には大きな水の流れになる現象に例えたのである（キヤス・サンステイーン『インターネットは民主主義の敵か』石川幸憲訳、毎日新聞出版、二〇〇三年）。

人は誰でも、自分と同じ価値観の持ち主と交流すれば快適であり、反対に激しく反論されれば気分が悪いので、ネット空間では自分と似た価値観を持つSNSユーザーを選んでフォローする。（中略）それは自然なことだが、こういう似た者同士が集う空間では、自分がSNSで意見を発信しても、自分と似た意見ばかりが返つてくる。このように同じ意見ばかりが返つてくる現象を、閉鎖された小部屋で音が反響する物理現象に例えて「エコーチェンバー」という。

サンステイーン氏は、ネット空間では付き合う相手を選ぶことができるため、インターネットには人間を一つのエコーチェンバー空間に閉じ込めてしまう特性があることを見抜いた。そして⑦エコーチェンバー空間の中ではサイバー・カスケード現象が発生し、多数の人が同じ意見を支持していることを空間内の皆が実感し始めると、異論を差しはさむ人を徹底して排除し、その空間内の主張が極端に単純化され過激になることを指摘したのである。

こうした環境下では、「自分が知らない情報や、知りたくない情報の中にも、知つておくべき情報があるだろう」と考えることができるかが最初の分かれ道になる。ここで「自分が知りたい情報」だけを選ぶ道に進めば、その人は特定のエコーチェンバー空間に閉じ込められ、異質な意見をすべて排除していくことになるだろう。

一方、「自分が知らない情報や、知りたくない情報の中にも、知つておくべき情報があるだろう」と考えて情報を集める人のところには、様々な情報が集まつてくる。

だが、情報の（注15）カオスともいえる状態の中から良質な情報を選び出していく作業は、しばしば困難である。昔は新聞社やテレビ局の編集者が料理した美味しい「情報ランチ定食」を食べていれば済んだものが、今は自分の能力を頼りに情報の出所を吟味し、情報同士を比較し、ニセ情報をあぶり出さなければならぬ。

本書の第一章で言及した（注16）インフォデミックが発生している今日、その（注17）知的負荷に耐えられなくなる事態は誰にでも起これ得る、と私は考える。そして、その時に誰もが陥る可能性があるのが、何でも話を単純にしたがること——すなわち「これさえ知つていれば、社会全体や世界全体について説明できる」という陰謀論・史観に飛びつくことである。

（中略）

「アメリカは既得権益層のエリートから成るディープ・ステート（国家内国家）によつて支配されており、大統領選挙は彼らによつて仕組まれた不正選挙である」

「マスコミは本当は何でも知つてゐるのに、権力の一部なので眞実を一切報道せず、世論操作するための嘘を流してゐる」

こうしたゲンセツは、その強い断定調の物言いに特徴がある。陰謀論に基づくゲンセツは、証拠を一つ一つ積み上げた末に導き出した結論ではないので、「これさえ信じていれば、世界全体について説明できる」ように単純化され、さまざま問題について自分の頭で深く考え抜かなくてもいいようにデザインされている。

陰謀論・史観は、最も知的負荷の少ない世界についての解釈方法なので、インフォデミックの海の中で不安にさいなまれ、膨大な情報を吟味し続けることに疲れた人にとっては、心安らぐオアシスのように見えることがあるのかもしれない。（⑧情報を巡るそうした状況を徹底して利用したのがトランプ氏であり、その側近たちであつた。

（白戸圭一『はじめてのニュース・リテラシー』より　一部改めたところがある）

（注1）フェイクニュース：うその内容を含む報道記事。（「フェイク」は「にせもの」「まやかし」という意味。）

（注2）SNS：ツイッター・ライン・インスタグラムなどの、インターネット上の登録会員向けの情報交換・交流サービス。

（注3）CNN：アメリカの国際的なニュース専門テレビ局。

（注4）恫喝：おどしておびえさせること。

（注5）執拗：しつこい様子。

（注6）史観：歴史を考えていくときの基本となる考え方や態度。歴史観。

(注7) 秘密謀議：人の知られないところではかりごとの相談をすること。
(注8) ロビイスト：特定の組織・団体の代理人として、政党や議員や官僚、さらには世論に働きかけて、その団体に有利な政治的決定をおこなわせようとする者。

(注9) 既得権益層：すでにがしかの権利や利益を自分のものにしている人々・集団。
(注10) 隠蔽して：見られては都合の悪い物事をかくして。

(注11) トートロジー（同義反復）：繰り返したからといって何の意味も明瞭さも付け加えないような同じ言葉の繰り返し。

(注12) マスゴミ：マスコミを批判的に扱う際に用いられる俗語。

(注13) 田中角栄：日本の政治家。一九七二～七四年に首相を務めた。

(注14) 忌避する：きらつて避ける。

(注15) カオス：秩序が認められず、物事の区別やなりゆきがはつきりしない状態。

(注16) インフォデミツク：流言やデマが世界規模で広がっている状態。

(注17) 知的負荷：ここでは「さまざまな情報について自分の頭で考えていく責任を持つ」ということ。（「負荷」は「責任を身に負うこと」という意味。）

(一) 波線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a カクサン b ゼック c サイカク d フルス e ゲンセツ

(二) 傍線部①「三〇歳前後の男性」とあるが、筆者はなぜこの「三〇歳前後の男性」のことを取り上げているのか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好きな女性に自分の思いを伝えようとただけなのに警察に逮捕された人のことを取り上げて、警察でもまちがえることがあるとう本文のもう一つのテーマを導くため。

イ マスコミは圧力を受けているために真実を書くことはないと信じている人のことを取り上げて、この後の陰謀論や陰謀史観の説明につなげていくため。

ウ 権力によって犯罪者に仕立てあげられて筆者に助けを求めてきた人のことを取り上げて、権力のおそろしさという多くの人の気づいていない真実を明らかにするため。

エ 権力にこびてばかりいるマスコミが真実を書くことはないと確信している人のことを取り上げて、世の中に広がるフェイクニュースの存在を印象づけるため。

(三) 二重傍線部「相槌を打つて」とあるが、この慣用句について以下のA・Bの問い合わせに答えなさい。

A 本文での意味としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人の話に調子を合わせて

イ 他人の話を聞くふりをして

ウ 他人の話に心の底から共感して

エ 他人の話を覚えておこうとして

B この慣用句と同じように「を打つ」という言葉がいつしょに使われる慣用句は多くある。次のア～エの中から「を打つ」といつしょに使われないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 芝居 い なだれ ウ ぼろ エ 舌鼓

(四) 傍線部②「そうした人々の「情報」に対する認識の変化」とあるが、人々の情報に対する認識がどう変化したと筆者は述べているか。

その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア テレビや新聞などのマスメディアは事実をおもしろおかしく報道することしかせず、インターネットで流れている情報の方が真実に近いと考えるようになつた。

イ テレビや新聞などのオールドメディアの役割はすでに終わつていて、情報はすべてインターネットの世界をとおして伝えられていると考えるようになつた。

ウ テレビや新聞などのマスメディアはさまざまな権力とともに陰謀を企てていて、本当のことはインターネットの世界に存在していると考えるようになつた。

エ 今の社会は陰謀を信じる人たちが作ったフェイクであり、本当の世界はすべてインターネット空間の中に形作られていると考えるようになつた。

(五) 傍線部③「陰謀論者は自分の意見に賛成してくれる人の言うことだけを認め、自分の意見が否定された時には陰謀の存在を主張し、根拠薄弱な「事実」や荒唐無稽な「証拠」を挙げて反論を試み、冷笑や嘲笑を浴びせる。」とあるが、これは破線部「近年の陰謀論・史観の持ち主に共通する特徴として次の六点を挙げている」にある、鳥賀陽氏の挙げた（一）～（六）の特徴のどれにもつとも近いか。一つ選び、漢数字で答えなさい。（ ）はあつてもなくともかまいません。

(六) 傍線部④「恐ろしい社会」とはどのような社会か。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学や知性の存在を否定して、権力を持つている人の言うことがいつも正しいと思いこんでいる人がたくさんいる社会。

イ 科学や知性や常識が通用せず、自分の信じている情報が正しいのかどうかを知ろうとしない人が他の人に影響を与える社会。

ウ 他人はいつも考えを押しつけてきて、こちらの気持ちを理解してくれることはないと、多くの人が人間不信におちいつっている社会。

エ 少数の陰謀論者が力を持ち、人々に考えるひまを与えないまま、生き方や考え方を陰謀論者の都合のいい方向へと変えていく社会。

(七) 傍線部⑤「情報平等社会」と傍線部⑥「情報ランチ定食」という言葉をとおして筆者はどのような社会のあり方を述べようとしているか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 質が高いとはいえないが、新聞やテレビなどによつて国民に情報が同じように伝えられ、とりあえず世の中の大きなできごとは知ることができているという社会のありかた。

イ 地方都市の人と都市部の人との間に知つてゐる事柄の差があつて、その差が埋められないほどに広がつてしまつてゐるが、人々がそれに気づかず満足しているという社会のありかた。ことばら

ウ 知りたくない情報だけではなく、知りたくない情報もあって伝えることで、情報の量をふやし、複数の情報を比較する能力が身についていくという社会のありかた。

エ 自由に選ぶことはできないが必要最小限の情報だけは確実にすべての人に提供され、その情報を利用して人々が豊かな生活を営むことができるという社会のありかた。

(八) 傍線部⑦「エコーチェンバー空間の中でサイバー・カスケード現象が発生し」とはどういう意味か。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ意見ばかりが存在する場で、その一つの意見に同調した人々がほかの集団を攻撃こうげきしていくこと。

イ 同じ意見しか存在しない場で、その一つの意見が強い力を持ち、反対意見を排除するようになること。

ウ 反対意見が認められない場で、ある一つの意見が強い力をもつて、社会のありかたを変えてしまうこと。

エ 反対意見の返つてこない場で、ある一つの意見に同調した人々が集まつて、大きな集団になること。

(九) 傍線部⑧「情報を巡るそうした状況」とは、どのような「状況」のことか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思いどおりにいかない世の中に疲れはてた人々が、疲れをいやすためにテレビや新聞ではなくインターネットの世界にのめりこんで心の安らぎを得ている状況。

イ 知りたい情報だけを手に入れられるようになつたことで、同じような意見の持ち主が一つの集団を作り、自分たちの理想とする社会を作ろうと考えて、違う意見を持った者を攻撃していく状況。

ウ 深く考え抜いた人々がこれさえ知つていれば世界全体を説明できるという陰謀論にたどりつき、真実を報道しないマスメディアをきびしく批判している状況。

エ 情報があふれかえつて秩序が失われ、根拠のないうわざ話さえ広がつてゐる中で、そのことにたえられなくなつた人がもつとも単純な解釈に飛びついてしまつてゐる状況。

(十) 本文に書かれていることと一致しているものを次のア～クの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア アメリカ大統領になつたトランプ氏は、マスメディアの陰謀をあばくことで、大統領選挙に勝利した。

イ バイデン氏は大統領選挙の当選が決まつた直後に、トランプ氏に敗北を認めるよう忠告した。

ウ 大統領選挙の不正を主張しているのはアメリカの人々だけで、日本にはそのような人は存在しない。

エ 鳥賀陽弘道氏は陰謀論者の特色として、他人に何を言われても意見を変えようとしないことをあげている。

オ トランプ氏は人々の考え方の変化をいちはやく知り、それを利用して権力を手にしたといえる。

キ 陰謀論者は大統領選の不正が見つからないのは既存の権力が不正を隠しているからだと主張している。

ク インターネットの普及により、同じ意見を持つ者たちが社会との関わりを断つた集団を作るようになった。

マスコミが世論操作のために嘘を流したことで情報の入り乱れた状況が生まれ、人々を不安におとしいれた。

③ 次の（二）～（四）の文章の内容から確實に正しいと言えることを、後に続くア～ウの中から、それぞれ記号であるだけ選びなさい。

一つも正しいものが無い場合は、「×」と答えなさい。

(一) 3Dプリンターとは、パソコンなどで作成されたデータを元に、完成品をスライスした断面にあたる層を積み上げて、立体を作る機器のことです。一般的にプリンターと呼ばれる機器は、紙などの平面にインクを出して文字や図を印刷するのですが、3Dプリンターは、樹脂に光を当てて少しづつ硬くさせたり、一定の温度で溶かした樹脂を積み重ねたり、粉末状の材料にレーザーをあてて焼き固めたりと、さまざまな方法で立体物を作ります。

ア インクを用いて文字や図を印刷するプリンターは、3Dプリンターの一種と言える。

イ 3Dプリンターは、インクの層を積み重ねることで立体を作る。

ウ 3Dプリンターで作る立体の材料は、樹脂以外にもある。

(二) 夏の暑さをしのぐために風を起こす道具に扇子があります。檜扇ひおうぎという扇子の一種は平安時代の初期、多数の木簡を束にしたものから考案されたと考えられていました。木簡とは、紙がまだ貴重だった頃、文字を書くメモとして用いていた薄い木の板のことです。つまり、何枚ものメモを束ねたノートのようなものが、扇子の原型だつたというわけです。ところが、さらに昔の奈良時代の遺跡いせきから、木の薄板うすいたでつくった日用品の扇子が出土したそうです。

ア 昔は紙に字を書く代わりに、薄い木の板に字を書くことがあった。

イ 風を起こす扇子が木で作られていたので、メモ代わりに使われるようになった。

ウ 奈良時代の遺跡の発見で、木簡の束から扇子が発明されたという説は決定的になつた。

(三) マラソンは、紀元前のギリシアで始まったといわれていますが、長距離のリレー競走である「駅伝」が初めて行われたのは日本です。距離、区間、人数に特に決まりはありませんが、一般的には5～10区間、1人が走る距離は5～20キロメートルで行うことが多いようです。海外では「ロードリレー」という呼び方で、マラソンと同じ距離を、6区間に分けてリレーすることがあるそうです。日本初の駅伝は、大正6年4月に3日間にわたって行われ、京都から東京までの516キロメートル、23区間を走ったそうです。

ア コースを4区間にしか区切らなかつた場合、そこで「駅伝」という競技は成立しない。

イ マラソンとロードリレーは、実質全く同じ競技と言える。

ウ 史上初の駅伝は、京都から東京までをコースにして行われた。

(四) こんにゃくは、こんにゃく芋という芋が原料ですが、そのままで毒が含まれており、食べることはできません。奈良時代には灰を混ぜた水でゆることで、毒を抜く方法が確立していました。今のようなこんにゃくは、芋を粉にしたものから作られており、この作り方は江戸時代に始まりました。芋の粉を乾燥させると保存が利くようになり、これが全国で生産できるきっかけとなつたそうです。そしてこんにゃくといえば、あのぶるぶるとした感触ですが、なぜあのような弾力が生まれるのかは、現在も科学的には解明されていません。

ア こんにゃく芋の毒を抜くには、灰を混ぜた水でゆるとよい。

イ 粉からこんにゃくを作れるようになるまでは、保存が利かないため全国で生産できなかつた。

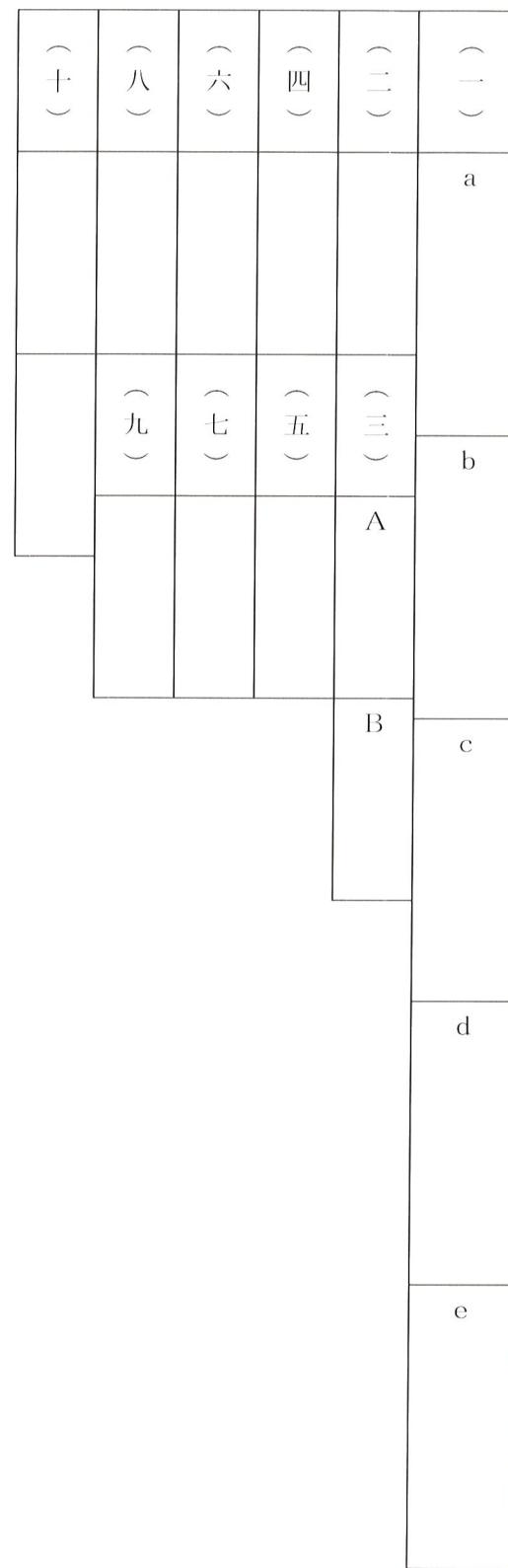
ウ こんにゃくの弾力がうまれる理由は、今後も解明されることはないだろう。

得点	
受験番号	

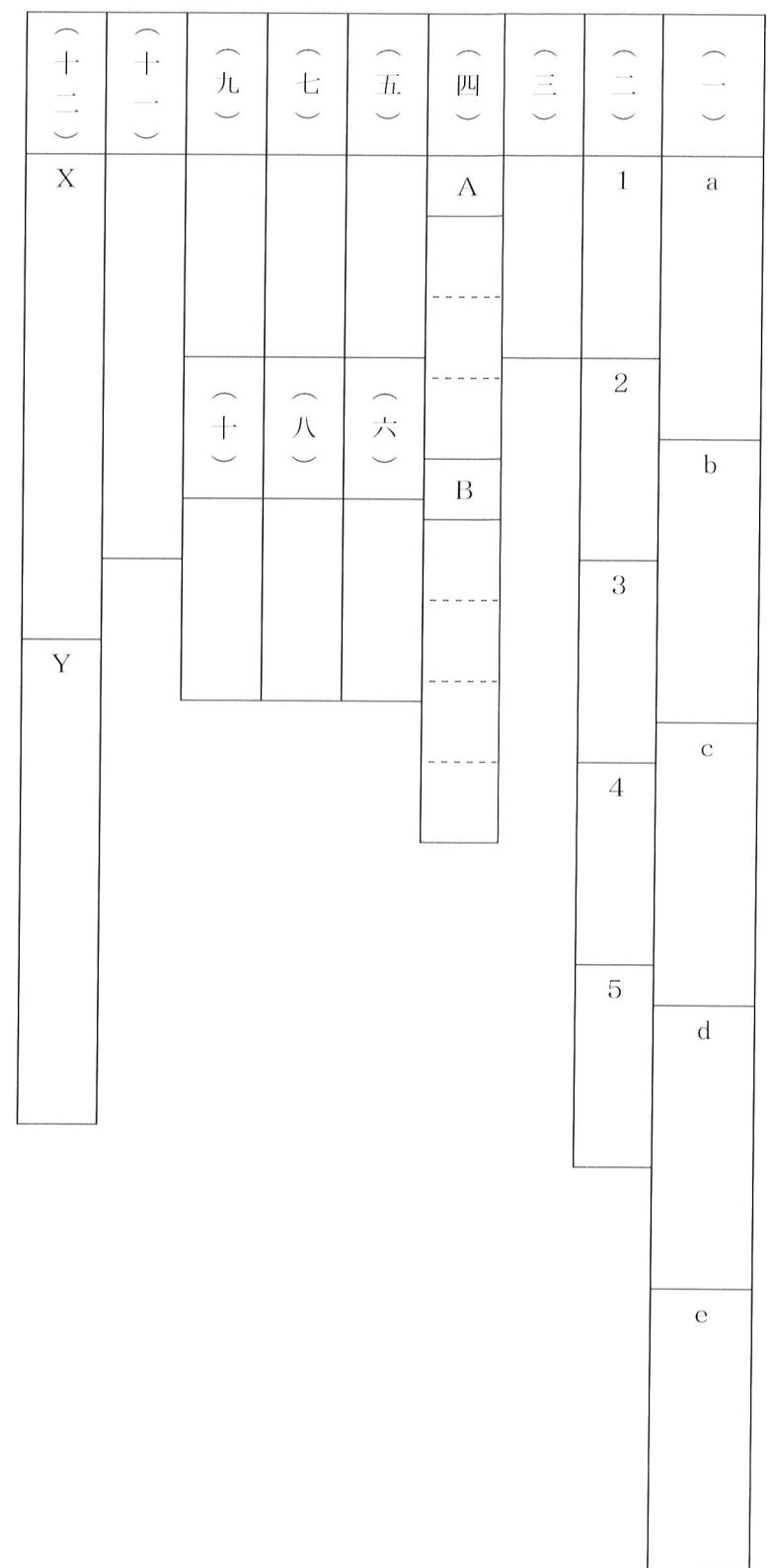
(3)

(三)	(一)
(四)	(二)

(2)



(1)



令和五 中入

「中期B・J」

解答

①

(二)

a

通勤

2

b

提案

3

c

損

4

d

親身

5

e

絶好

〔完答〕

②

(二)

a

成美

Y

6

7

c

才覚

d

古巣

e 言説

③

(二)

a

拡散

B

ウ

絶句

ウ

才覚

d

古巣

e 言説

〔完答〕

計
20
点

計
50
点

計
50
点